

**【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究会主催 研究ワークショップ  
「感性ことばで遊ぼう オノマトペがひらく物語の世界：宮澤賢治の「雪わたり」」報告（2014年度  
聖学院大学総合研究所）**

著者	出野 由紀子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.24
号	No.2
ページ	30-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1477/00002770/">http://id.nii.ac.jp/1477/00002770/</a>

<b>Title</b>	【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究 会主催 研究ワークショップ「感性ことばで遊ぼう オノマトペがひらく物 語の世界：宮澤賢治の「雪わたり」」報告（2014年度 聖学院大学総合研 究所）
<b>Author(s)</b>	出野，由紀子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :30-31
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5247">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5247</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 2014年度 聖学院大学総合研究所

【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究會主催 研究ワークショップ  
「感性ことばで遊ぼう オノマトペがひらく物語の世界 —宮澤賢治の「雪わたり」—」報告

2014年11月29日（土）聖学院大学に於いて、聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと 絵本研究會主催「感性ことばで遊ぼう—オノマトペがひらく物語の世界 —宮澤賢治の『雪わたり』—」のワークショップが、10時30分から12時30分の時間で開催された。参加者は50人。朗読・講師は人形劇団ふーせん劇場を主宰する宇奈月つや子氏。宇奈月氏は、いろいろな地域の多くの子どもたちに人形劇を見てもらいたいとの思いから、人形劇団「ふーせん劇場」を一人で設立。劇団設立当時に、一人芝居の作品「こぎつねコンとこだぬきボン」を制作し、各地で公演を続け、その後も数々の作品を創作して、30年以上様々な活動をしている。今回上映する作品は宮澤賢治の幻想童話—透明・清浄な北国の冬を舞台に、人の子と狐の子との交歓を描く感性を澄ませた繊細な作品。

開催日は11月末、冬の厳格な寒さが身体を差すような朝、オノマトペを散りばめた会場が心を豊かに思慮深く思考する雰囲気を作り上げる。「ワクワク」と聞けば、よくわからない近い将来にドキドキしながらも前向きに立ち向かおうとする人の意欲を感じるように、「ざわざわ」ということばから稲穂が風に触れる風景を思い、「きらきら」ということばから、夜空を見上げ降り注ぐ星の瞬きを感じ取る。そのような期待を全身で感じながら参加者はこれから開かれる宇奈月氏のオノマトペの世界を「ワクワク」しながら待ち続ける。まずは『雪わたり』のスライドを使って宇奈月氏の音読からはじまる。男の子、女の子、狐、ナレーターなど、まるでそれぞれの声優が存在しているかのような語り部で、会場は一瞬の内に雪国の中に連れ込まれる。「かた雪カンコ、しみ雪シンコ…」このフレーズがまるで音楽のように会場を包む。スライドの絵がその調べと重なると、平面が立体に、そして

静止画像がまるで動画になっているかのような錯覚に陥る。ナレーターは体を使って身体の内なる言葉を表現しているようであり、子どもも大人も一体となってオノマトペの感性の世界の住人になるのである。デジタルの世界に慣れてしまった現代社会の中で、我々が本当に求めているものを突き付けられているような衝撃であった。

開始15分後、宇奈月氏は「『雪わたり』の中には、言葉という宝石がちりばめられているので、音読の際はオーバーにならず、強調もせず、その言葉の感性を内なる声で語ることが大切」と述べ、音読の大切さを語る。また「頭で考えないで心で表現することが肝要」とも。開始25分、子どもも大人も全員立ち上がりストレッチがはじまり、今まで宮澤賢治の世界にいた住人が一斉に動き始める。発声練習では、みるみるうちに参加者の声を通るようになっていく。声は体を柔らかくしないと通らない、体と心はここでもつながっているのである。35分、シートで雪山を作る、そしてその雪山に楽器の音をつけると更に迫力がでる。布を使って風を表現、一枚の布が、その動き方一つで様々な風をも表現することができる。45分、子どもたちが前に集まって「しみ雪しんしん、かた雪かんかん」と言いながら雪の気持ちなる。手に持った紙と綿をどうやって落としたり「雪」になるか、子どもたちなりに考えているようである。開始1時間後、大人も混ざって『雪わたり』の世界を再現開始。グループに分かれみんなで創作、子どもも大人もなくみんなが物語の住人になって一つ一つの場面を織りなす姿は、不思議とまわりも和ませる。打楽器の意味のない旋律が言葉にはない意味を付加しているようである。大人の表情は子どもの屈託のない笑顔と同化し感性ことばが自然とわきあがる。

オノマトペが開く物語の世界は、読み手の脳活

動を活性化しながら子どもに伝えるメッセージを体からわき出るように仕向けている。メッセージをからだで表現することにより読み解き、言葉を超越した「感性」を味わうことを可能にする。このワークショップにより子どもたちはオノマトペを豊かに散りばめた原体験をすることになる。子どもと大人とのコミュニケーションの手段であった絵本がからだや音楽を使うことにより世代を超えた伝達ツールへと変容していく様をこのワークショップは提供するのである。「オノマトペ」、「ことば」、「あそび」が一体となり、「ワクワク」、「きらきら」した原体験として子どもの心を豊かにするようである。



右上：石川由美子教授、  
左上：宇奈月やつ子氏（講師）  
下段：参加者、出演者集合写真

（文責：出野由紀子[イデノ・ユキコ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程3年）